摩天楼の下で

休日 (2001.11)

「う…ん……」
　優しいギイの指が体を滑る。
「気持ちいいか、託生？」
「う……うん」
　囁きが風になって耳に届き、指先が次の場所を探す。
「ここは？」
「…い……ぃ……」
「ばかだなぁ。言ってくれればいいのに。こんなにカチカチになって」
「だって……」
　苦笑まじりの声に、とりあえず反論を口にする。
「我慢は体によくないぞ」
「でも…あっ、痛っ！」
　ギイの指先に、ぐっと力が入り、ぼくの体は緊張に硬くなった。
「ほら、力抜いて」
　そんなこと言われても、
「あ……ん、できないよ、ギイ」
　硬くなった体は意志に逆らって、ギイを受け入れてくれない。
「託生、ゆっくり息、吐いてごらん」
「は…ぁ……」
　言われたとおり息を吐くと、少し痛みが薄れた。
「いい子だな」
　ふふっと笑ったギイの声が、背中に響いた。
　目を閉じて、ギイの指の動きを追う。その優しい動きに体を委ねると、ふわりと体が浮くような感覚がやってくる。
「だいぶ、ほぐれてきたぞ」
　ギイの声にハッとして、目を開けた。
「うん、ありがとう、ギイ」
　ぼくは起き上がってギイに向き直り、ペコリとお礼を言う。
「しかしバイオリニストも大変だな。肩凝りが持病だもんな」
「うん、首回すのもしんどかったんだ」
　顎と肩で支える演奏姿勢は、かなり負担がかかる。
　あまりにも首をこきこきと鳴らしていた為、不思議に思ったギイがマッサージ師をかって出てくれたのだ。
「疲れてるのに、ごめんね」
「このくらい、どうってことないさ」
　ギイはチュッと口唇にキスを弾ませて、ニコリと笑った。
「さてと、体も軽くなったことだし、買い物がてらドライブでも行くか？」
「あ、賛成！」
「よし。オレ車のキー取ってくるから、コート用意しててくれよな」
　ギイは言い置いて、部屋を出て行った。
　二人分のコートをクローゼットから取り出して、ギイの待つ玄関へ足を向ける。
　外はデートにはもってこいの晴天だ。
　これが休日の過ごし方。
　いつもエッチばかりしてるわけじゃ、ないんだよ。

SSを書くとき、私の場合よく台詞から入って書いてます。で、この話が典型。
もともと友人の携帯に台詞だけ送ったのが、始まりです(笑)
ほら、下にスクロールしていくと、ドキドキするでしょ？
こうやって友人を驚かすのが、私の楽しみだったりします（迷惑なヤツだ…）
（２００２．９．４）

卒業 (2001.11)*Night*

ギイタクではなく”タクギイ”です。
リバが苦手な方は、バックしてください。

　ベッドサイドの明かりが点いただけの、薄暗い部屋の中。
　ギイはソファに座り、ストレートのウィスキーで喉を湿らせていた。水音の跳ねるバスルームを横目で伺い、また一口流しいれる。
　自分でもピッチが早い事には、気が付いていた。でも、これからしようとする事は、酒の勢いでもなければ、出来ない事なのだ。
　シャワーの音が止まると部屋は静けさに包まれ、アイスペールの氷がカチリと滑り落ちる。程なくしてカチャとドアが開き、微笑を浮べた託生が裸足で一歩を踏み出した。
　今日二十歳を迎えた託生は、高校時代よりも少し大人っぽく・・・。けれども昔と変わらぬ澄んだ瞳は、今でもギイの胸を熱く揺り動かす。
　真っ直ぐにソファに向かい、ストンとギイの隣に腰を降ろした。
「また飲んでたの？」
　チクリと非難した託生の言葉には応えず、ギイは意を決したように一つ息を吐き、託生に向き直った。
「誕生日おめでとう」
「どうも、ありがとう。って今日は何回も訊いてるよ。どうしたの、酔っ払っちゃのかい？」
　おかしそうに託生は笑って、ギイの肩に頭を乗せコロンの香りを楽しむ。
「あのな、託生」
「うん？」
　目を閉じて心地よい鼓動を訊きながら、託生は次の言葉を待った。
「託生は……童貞か？」
「……は？」
　言われた意味が理解できずに、もたれかかっていた頭を上げ、まじまじとギイの瞳を探る。
「だから、託生は誰か抱いた事あるかって訊いたんだよ」
「そそそそんな事、あるわけないじゃないか！」
　恥かしさの余り俯いた託生は、首まで真っ赤になっている。
ギイが抱く側、託生が抱かれる側。このスタイルで始まって、それが当たり前で……。浮気など思いつかない託生には、抱くと言った行為には無縁であった。
「けど、お前も男だし、二十歳で童貞って余りいないじゃん」
「それは…そうだけど……。もしかして、ギイはぼくに浮気させたいのかい？！好きでもない女の子を抱けって言うの？！」
　ハッと気付いて怒鳴り返した託生は、半泣き状態である。
「誰が浮気しろって言った。託生の体に触っていいのは、オレだけだろ？」
「じゃあ、どうしてそんな事、訊くんだよ？」
　心細げに見上げた託生にドキリとしながら、今日はそうじゃないんだぞと自分を戒め、でも次の台詞を言うには自分で決めた事ではあったが、照れが交じって目を泳がせた。
「だから、今日は託生が抱けよ」
「え？」
「託生がオレを抱けよって言ったんだ」

「……えぇ？！」
　驚きの余り口をぱくぱくさせて、言葉が出ない託生に、
「童貞卒業できるだろ？」
　ニヤリと笑った。
「でも、でも、ぼく、そんな事、できないよ」
「お前、男だろ？持ってるだけじゃ宝の持ち腐れって言うもんだよ。きっと、できるさ」
「そうじゃなくって…、あの……えっと……」
「誕生日のプレゼントにギイ君をあげようって言ってるんだぜ」
「でも……やっぱりできないよ。そんな事、考えた事ないし……絶対下手だし……ギイ、怪我させちゃうかもしれないし……」
　内容が内容だけに、しどろもどろになりながら、託生が反論する。
「処女は痛いもんだと相場が決まってるんだ。それに今日だけだし。もしかしたらオレもハマルかもしれないし」
　ハマリたくない本心を隠して、にっこり笑う。
「な？」
　ギイの全開の笑顔に、相変わらず逆らえない託生は、嫌々ながらも小さく頷いた。

　いつもと違う展開。戸惑う託生をギイはベッドに寝転んだまま、抱き寄せて口唇を重ねた。
　年上のお姉様がリードするって言うのは、どこでもある話だ。たまにはこういうシチュエーションもいいかなと、ギイは密かに思っていたりもする。
「ほんとに、いいの？」
「いいよ。託生、オレを感じさせてくれよ」
　その一言に、託生は心を決めた。このまま流されて抱いてしまうよりは、出来る限りギイを気持ちよくしてあげたい。
　いつもは眠っている託生の男としての本能に、火がつけられた。
　自分から口唇を重ね、そっと舌を差し入れる。舌の付け根をくすぐると、ギイがふっと笑ったような気がした。
　ムッとしながらも、ぼくだって男なんだから、絶対ギイを気持ちよくさせるのだと、自分がされて気持ち良かった事を、実行に移した。
　耳朶に口唇を寄せ、下から上にゆっくり舐め上げる。次はわざと首筋から耳に移動しながら、きつく吸い上げて甘噛みをしていく。
　小さくピクリとギイが動くと、託生の心に少しばかり自信が生まれた。
　もっと色んなギイの顔を見てみたい。征服欲と言うのは、こういうものなのかなと、初めて芽生えた気持ちに、素直になってみる。
　触れる事しかなかった乳首を口に含み、片方の手をギイに添える。舌先で乳首の感触を楽しみながら、添えた手を上下に動かすと、肩に掛かったギイの手に力が入った。
「おい、託生……ちょっと、ストップ」
「やだ」
　ギイを喘がせている事実に、気を良くした託生は、胸から腹、そして下腹部へと口唇を降ろしていき……、
「うっ……！」
　ギイを柔らかな口内に誘い込んだ。
「託生……」
　参ったな……。ギイの心中は複雑だった。託生の童貞卒業の為、自分を抱けと言ったが、まさか託生がこんなに上手いとは思わなかったのである。
　託生のように甘い喘ぎ声など、出す事は不可能だが、歯を食いしばっておかないと、乱れた息が漏れてしまう。

いつもリードしてきたギイにとって、感じているのを託生に知られてしまっては、これを機会に逆転されてしまうかもと、本気で心配になってきた。
その間にも、託生は確実にギイを快楽に連れて行く。吸い上げながらも、喉の奥深くに咥え込み、敏感な裏側を丹念に舌で舐めていく。
「託生……離せ……」
限界を感じ託生の頭を押しやろうと、腕を伸ばすが、理性に逆らって押し付けてしまう。
不意に、託生の指が誰も触ったことのない、蕾を撫でた。
「本当にいいの？」
口唇を離し、小さな声で訊く。
「いいよ」
投げ出された欲望がズキズキと痛み、また託生の顔を自分に押し付けた。
託生は素直に舌を這わせながら、唾液に濡れた指先をそっと蕾に差し込む。無意識に力の入るギイの体を慮り、ギイの意識がそこに向かないよう口唇に神経を集中させながら、指先で経験上、覚えのある一点を探す。
「くっ……！」
髪に絡むギイの指に力が入り、口の中にギイが欲望を放った。コクリと飲み下し、顔を上げると、ギイは薄く目を開け幸せそうに微笑んだ。
「次は託生の番だよ」
小さく頷いて、ギイの足に手を掛けて、止まった。
「あの……後ろからの方が……楽だと思うんだけど……」
「そうか。じゃ」
くるりと反転して、ギイは自分でうつ伏せになった。
「ほんとに、いいの？」
今夜、何度目の台詞だろう。ギイはクスリ笑って、
「遠慮せずに、挿れてくれ」
内心不安で一杯なのを悟られないように、平然な声を出した。
託生は戸惑いながらも、痛みが少ないように蕾に舌を這わせて、丹念に開いていく。そして、ギイに自分自身を押し当て、ゆっくりと身を静めた。
「うぁっ……！」
「ん…！」
同時に上がった声は、全然種類の違う声色。ギイは余りの痛さに息をつめ、託生は余りの快感に動く事もできなくなっていた。
「やっぱり……できないよ……」
じっとしたまま、ポツリと洩らす。託生が動かずにいてくれたのが幸いで、ギイはかなり痛みが薄れていた。
「どうして？オレのことなら気にするな」
「うん。でも、このままだったら、ぼくだけ気持ち良くなっちゃう」
手探りで触ったギイは、すっかり萎えている。
「さっき託生にしてもらったからな」
「でも……」
「いいから。さっさと卒業してしまおうぜ」
裏を返せば、やっぱり挿れる方がいいと暗に言っているのだが。
「じゃ……」
ゆっくりと託生が動き出した。とたん、内臓を押し上げられるような不快感が、ギイの体に駆け巡る。
どうやったら、これが快感に変わるのだろうか。痛みに耐えながら、意識を別な所に持っていく。そうでもしないと、この行為は耐えれそうになかった。
「ギイ……ギイ……」
色めいた吐息を耳に吹きかけ、託生が腰を揺らす。ふいに、

「うっ……！」
　ギイが低く呻いた。とっさに手で口を抑える。ギイの体を電流が走りぬけたのだった。
「ギイ？」
　心配そうな瞳に、なんでもないと手を振り、これはヤバイぞと本気で思った。案の定、大人しかった部分は、あっと言う間に堅く変化している。
　おずおずと動きを再開した託生は、確実にツボを押さえてきた。歯を食いしばろうが、意識を反らそうが、一度知ってしまった快感はギイの体を熱く駆け巡る。
「託生！ストップ！」
「え？……でも、ぼく……もう……」
「イキそう？」
「……うん」
「実は、オレも、もう、ダメだ」
「へ？」
　託生の手を自分に導き、握らせると、託生は嬉しそうにぺとっと背中に抱きついた。
「ギイ、感じてるの？」
「つもりはなかったんだけどな。託生、どこかで練習してるんじゃないのか？」
　照れ隠しで言った台詞に、
「初めてだよ！」
　託生は怒鳴り返し、仕返しとばかりに腰を激しく揺らし始めた。
「託生……！待て……！」
「ダメ……もう……あ……」
「託…生……く……ぅ」
　ギイの最奥で託生が放つ。つられるように、ギイも手の中に放った。
「はぁ……」
　肩で息をして、託生はギイの背中に倒れ込んだ。ある程度呼吸が整ってきた頃、ゆっくりと体を離してギイの隣に寝転がると、
「ギイ、ありがとう」
　頬に軽くキスをした。
「どういたしまして。気持ち良かったか？」
「うん……でも……疲れた」
　顔を赤く染め、恥かしそうに目を伏せた託生に、愛しさが募る。感じる事はわかったが、やはりオレは託生を抱きたい。喘がせて、泣かせて、託生の温もりの中で、イキたい。
　心の声が聞こえたように、
「ぼく、やっぱり、いつもの方がいいな」
　ポツリと呟いた。
　破顔したギイは託生に圧し掛かり、
「では、お言葉に応えて」
　託生を熱いキスで翻弄させ、取り返した主導権を行使した。
　託生の男としての本能は、二度と日の目を見ることは、ないだろう。

キッチン赤池さまのイベントに参加させていただいたものです。

予定(2002.1)

　ここは二人で住むNYのマンション。
　早めに仕事から帰ってきたギイと、久しぶりに二人で夕食を食べ、後片付けをしてからリビングに戻ると、ギイはテレビを見て寛いでいた。
「何見てるの？」
　食後のコーヒーを差し出しながら、ギイの隣に腰掛ける。
「ん？街角のペアルックを取材しているらしい」
　見れば、男女のカップルが、それぞれ個性あるペアルックを着て、映っている。
「こんなの見て、おもしろい？」
　ぼくには、どうもペアルックという物は理解できない。第一、同じ物を着て歩くほど、恥かしいものはないと思うのである。
「そうだな。オレ達は愛しあってますって、公言してるようなものだからな。いいかもしれないな」
　ギイの台詞にギョッとして、
「え、本気でそんな事、思ってるの？」
　ぼくは、そんな恥かしい事はいやだよと暗に匂わせる。
「本気じゃないけど、いいよなって思ってさ。ま、現実にはどっちかの好みに合わせないといけないだろ？それがもう一人に合わなければ、魅力も半減するよな」
　いや、そういう意味じゃなくって。
　合っている合っていない以前に、恥かしいという感情はギイにはないのだろうか。
　長い付き合いだけど、未だにギイを理解出来ないときがある。
「それじゃ、もしも二人とも似合ってたら？」
「最高だろうな」
　ウソだろ～～？！
　開いた口が塞がらない。恥というものを知らないのだろうか、この男わ！！
「どうした？」
　不思議そうな顔をして、ギイがぼくの顔を覗き込む。
「ま……まさか、ギイ……ペアルック……着てみたい……とか？」
「は？オレと託生じゃ、好みも違うし、似合う色も違うじゃないか」
「じゃ…じゃあ、そんな事、考えてないよね」
「あぁ、考えてない」
　ホォ～～～～。
　心底安心して、胸を撫で下ろす。
　そんな恥知らずな事は、いくらギイが好きでもぼくには出来ない。
「そうだ！」
　突然叫んだギイに、
「な…なに……？」
　びっくりしてギイを見ると、悪戯っ子のようにニヤリと笑った。
　いやな予感がする。その予感は十中八九、外れた事はない。
「パジャマだったら、ペアルックできるな」
「はぁ？」
「ほら、パジャマだったら色違いでも、託生とペアルックできるだろ？」
　呆れてしまう……。
　そんなにしてまで、ペアルックが着たいか。
「託生、明日はパジャマを買いに行こう」
　嬉々として話を続けるギイに、釘を刺すようにぼくは言った。
「でも、ギイ。いつもパジャマ着ないじゃないか」
　仕事で帰宅が遅いギイは、シャワーを浴びるとバスローブを羽織り、結局そのままベッドに潜り込む。

　パジャマを着ているところなんて、祠堂を卒業して以来、見た記憶がない。
「あぁ、そうか」
　やけにあっさりと納得して頷いたギイは、ぼくの肩に腕を廻し抱き寄せた。そのまま頬に口唇を寄せる。
「じゃあ、明日は託生のパジャマを買いに行こう」
「どうして、そうなるんだよ」
　耳に掛かる吐息がくすぐったくて、身をよじりながらぼくが応える。
「オレ、毎日違う託生のパジャマ、脱がせてみたい」
　一瞬で血が上ったように、顔が熱くなる。きっと今のぼくはユデダコのように、赤くなっているに違いない。
「ななな、なにを言って……」
　そのまま口唇に触れるだけのキス。薄く瞳を開けると、瞳を細めて優しく見詰めているギイと視線が合う。
「全部のパジャマが見れるように、早く帰ってくるから、毎日違うパジャマ着て待っててくれ」
「……うん」
　いつも、申し訳なさそうに「遅くなる」と電話を掛けてくるギイ。全部見ることなんて、かなり先の話なのだろうけど、ギイのその気持ちが嬉しい。
「ギイ……」
「愛してるよ、託生」
　ぼくも愛してるよ、ギイ。昔と変わらない想い。ううん、あの時以上に、君のことを愛しているよ。
「とりあえず今日は、このパジャマ、脱がせてもいいかな？」
　お伺いをたてるように、ひそひそと耳に口を寄せてギイが訊く。
「寝室でね」
　答えが終わらないうちに、ギイはぼくを抱き上げキスを落とした。

　明日はパジャマを買いに行こう。
　だから、今日は早めに寝ようね、ギイ。

初めて「星屑のプラッツ」様に、投稿したお話です。
というか、もともと悪戯心を起こして書いたエロギャグ話（Nightの『remenber again』）が、管理人さんに渡り、
投稿が決まったものの、初めてのところにそんな壊れたSSじゃ失礼だろうと、
慌ててオモテ用を書きました。
でも、たぶん、いや絶対、その時に私のイメージ潰れてたんだろうなぁ。
今は、充分承知しているだろうけど（爆）

約束 (2002.4)

「なぁ託生、大人になるって、どういう事かわかる？」
　突拍子もない話題に、宿題と格闘していたぼくは頭を上げた。
「大人になる事？」
「そう」
　う〜ん、そうだな。
「夢がなくなる事？」
「シビアだなぁ。託生くん」
　やれやれと言った体で、ギイがぼくを見る。
「じゃあ、何？」
「自分の思ったことを口に出さなくなる事。口実をつける事。隠し事をする事」
　あぁ、なるほど。
「それが、どうかしたの？」
「オレも託生も大人になるだろ？けど二人の間では、そういう事なしな」
　ギイは、机にひょいと腰掛け、ぼくの目を覗き込む。
「なしって？」
「お互い何でも素直に言い合おうって事さ」
　吸い込まれそうな薄茶色の瞳。この瞳に隠し事なんて出来ない。それは何年経っても変わらないだろう。
「うん」
「約束だぞ」
　ギイは指を絡ませ、チュッと口唇にキスを落とした。
「それはいいけど、どうして今そういう話をするんだい？」
「いや、この頃託生が素直に言ってくれないからさ」
「何を？」
　ギイはぼくの耳元に唇を寄せて、
「『抱いて』」
　囁いた。
　その直後、ぼくのパンチがギイのミゾオチにヒットしたのは、言うまでもない。

「……って約束したじゃん」
　確かに昔そういう約束したのは、覚えてはいるけど……。
「だからって、これは何だよ？！」
　出張から帰ってきたとたん玄関で抱き上げられ、ベッド直行は問題があるのじゃなかろうか。
「愛を確認したいって素直になっているだけじゃないか」
　涼しげな顔をしながら、ぼくの首に口唇を寄せ、両手はせわしなくパジャマを脱がす為に動いている。
「でも、まだ朝だよ！」
　チャイムの音で目が覚め、ぼくは起きたところなのだ。
「時間なんて関係ないね。第一託生もそうだろ？」
　すっと下着に手を入れニヤリと笑った。
「こ……これは、朝だから……」
「はいはい」
「ん……」
　触れる手の熱さに、体が目覚めていく。鼻を掠めるギイのコロンに、安堵の吐息が漏れてしまう。
「愛してるよ」
　優しく囁かれて、ぼくの体は波に飲み込まれていく。薄く開いた目にギイの笑顔が映り、近づいては消

えていった。
「愛してるよ、託生……」
　ギイという海の中へ……。帰ってくる事が出来ない、快楽の海へ。

ふとした日常を書きたくて、考えてみました。
でも、根っからのスケベだからか（爆）物足りなくて……。
あぁ、エロ書きと言われても、反論できない。
（２００２．９．４）

約束～under～ (2002.4)*Night*

　朝の光の中で抱かれるなんて、昔のぼくには到底考えられない事だけど……。
　一週間ぶりに帰ってきたギイに求められ、ぼくたちは白いシーツの上で縺れあっている。
　いつもは薄闇の中たどるギイの肩が、やけに白くはっきりと映り、ギイがここにいるとぼくに教えてくれる。
　全身にキスを落とし、両手でぼくの体を撫で愛撫するギイに愛しさが込み上げ、ぼくの体が泡立っていく。
　うっとりと名前を呼ぶと、口唇にギイが戻ってきた。
「ギ……イ……」
「託生……オレが欲しかった？」
　そう、ずっとギイに抱かれたかった。
　一人で寝るのは寂しくて……。ギイの匂いが残るベッドがぼくを包み込んで、体の芯が熱く疼いてどうにかなりそうだった。
「欲しかった？」
　答えを言わなければ、してやらないぞとばかりに、ぼくの入り口をゆっくり指でなぞる。知らずに揺れてしまう腰。触れ合う二人の熱いモノが、背筋に電流が走るほどの快感を呼び覚ます。
「や……だ……」
「はっきり言えよ、託生」
　いつもなら笑いを含む声も、荒い息の下、少し怒っているように聞こえた。
　入り口を彷徨っていたギイの指が、ぼくを煽るようにほんの少し中に入ってくる。
　もっと……！
　ぼくの体が悲鳴を上げる。
　早く、満たされたい。ギイ……！
　耳朶を含んでいた口唇が戻り、深く舌が忍び込む。
「は……ぁ……」
　クチュと唾液に濡れた口唇から、甘い蜜が零れ落ちる。
　それを追って離れたギイの口唇が恋しくて、ギイの頬に手を当てキスを強請った。
「素直じゃない託生には、キスしてあげないよ」
「お願い……」
　両腕でギイの頭を引き寄せ、口唇を重ねる。自分から差し入れギイの甘い舌を無我夢中で吸い上げた。
「オレが、欲しかった？」
　舌を絡めたままギイが問い掛ける。
　ずっとずっとギイが欲しかった。でも、口に出すのは恥かしくて、ギイの台詞を奪うように深く口唇を合わせ、腰を押し付ける。
「お前、ズルイぞ」
　口唇を離すと、ギイはぼくの足に手を掛け一気に押し入った。
「あ……あぁ！！」
　疼いて物足りないと悲鳴を上げていたソコに、熱く堅い衝撃が突き刺さる。逃さないとばかりに、反射的にぼくの体がギイを締め付けた。
「く……っ……オレの負けだよ。託生……」
　安堵の吐息さえも洩らせないほど速いスピードで、ギイが妖しく腰を揺らす。
「ふぅ……あ…ぁ……」
「そんな目で見られて、正気でいられるわけないだろ？」
「あ……あん……！」
「託生……託生……！」
　早すぎてついていけないぼくを思うがまま揺さぶるギイに、ぼくは叫び声しか上げられない。ギイの全てがぼくの中に流れ込んで、頭のてっぺんから足の爪先まで、絶え間なく快感が走る。

「……欲しかった」
「…託生？」
「毎晩……ギイに抱いて欲しくて……ずっと帰りを待ってた……」
　一瞬動きを止め、ぼくの瞳を覗き込むと嬉しそうに微笑み、ぎゅっと抱き締めた。
「オレも……ずっと、託生が抱きたかった……」
「ギイ……！」
「愛してるよ……託生」
　ギイはぼくを膝の上に抱き上げ、乳首に噛り付いた。
「はぁ……っ！！」
　その痛みさえも、快感に変わる。ギイの触れているところ全て、一つに溶け合っていく。
　早く……もう……変になってしまう……！
「も……ダメ……」
　涙ながらに訴えると、ギイはより一層奥深くに突き刺した。とたん大波が来るように渦に巻き込まれ、絶頂を迎える。
　頭の中が真っ白になる瞬間、ギイがぼく最奥に、欲望を放った。

「託生……」
「う……ん……」
　汗に濡れた前髪をかき上げ、心配そうに覗き込むギイ。
「大丈夫か？」
「うん……」
　口唇にキスを送ると、ほっと息を吐いてぼくを抱き締めた。
　気だるい時間。ギイの胸に頭を乗せ規則正しい心臓の音を聞いていると、自然に目が閉じてくる。
「一人でさっさと大人になっちゃうんだもんなぁ」
　ポツリとギイがぼやいた。
「え？」
　頭を上げてギイを覗きこむと、ちらっと視線を投げ掛け、
「託生。色っぽすぎ」
　怒ったように言う。
「何が？」
「まぁ、昔からお前、目で誘ってたもんな」
「な……！！」
「レベルが上がったってことか」
　一人で納得するギイの頭を、ぽかりと殴る。
「何言ってるんだよ！！」
「託生の色っぽさで子供のギイくんはノックアウトです」
　言いながら、ぼくに圧し掛かる。
「ちょっ……ギイ」
「大人は子供の我侭を受け止めてくれるんだろ？」
「もう、ダメだよ……」
　抵抗を物ともせず、ギイは無邪気に口唇を寄せた。ぼくを逃さない力強い腕。
　子供はこんなに力はないって！！
「愛してるよ、託生」
　深いロづけとコロンの香りに、ぼくの感覚が麻痺してくる。
「愛してる……」
　ぼくより子供だという恋人に溶かされ、もう一度快楽の海に落ちていった。

Rainy Day (2003.1)*Night*

　山の天気は変わりやすい。
　だが……突然振り出した雨は、バケツの底が抜けたような土砂降りで、フロントガラスを容赦なく叩きつける。と同時に激しい稲光が空に走った。
　久しぶりの休みに、託生と二人でドライブを楽しんだ帰路、こんな大雨に降られてしまうとはツイテナイ。
　あっという間に視界が暗闇に包まれ、ヘッドライトの明かりも雨に反射して前方が見えなくなってしまった。
「ねぇ、ギイ。これ、ちょっとヤバイんじゃない？」
　かすかに震えた託生の声が、助手席から小さく上がる。
「そうだな。スリップしちまっても、おかしくないよな」
　のんびりとした口調のオレに、
「ヤダよ。そんな怖い事言わないでよ」
　泣きそうな顔で、オレの右腕にしがみつく。
　託生が抱きついてくれるのは、オレ的には嬉しい事だが、今はそうも言ってはいられない。
　こんな所で、事故でも起こしたら大変だ。とにかく、車を止める場所を探さなければ。
　見えない視界に目を凝らし、休める場所をと探すオレの目にちょっとした空き地が映った。
　この辺りにホテルもレストランもないし……仕方がない。雨が止むまで、あそこで待とう。
　オレはハンドルを切って、空き地の奥、木の陰に車を止め、サイドブレーキを引き、ほっと息を吐く。
「ギイ？」
　右腕に抱きついたまま押し黙っていた託生が、車の振動が止まった違和感からか顔を上げた。
「この辺り、何もない所なんだ。雨が収まるまで、ここで我慢できるか？」
「うん……」
　頷いた側から稲光が上がり、託生は音のない悲鳴でもう一度顔を伏せた。
「オレがいるだろ？怖くないから」
　雷が特に苦手ではない託生だが、ここまでひどいとさすがに怖いのであろう。オレの右腕にしがみ付いたままだ。
　子供をあやすように左手でぽんぽんと背中を叩いてやると、しがみついていた腕を解き、オレの胸に顔を伏せた。
　しかし、生憎と運転席と助手席の間にはギアがある。抱き締めていても、託生の頭だけ抱いているに等しい。
　ガラガラガッシャーン！！
　地響きが鳴り響くような雷鳴に、託生が小さく悲鳴を上げた。
「託生、後ろに移動しよう」
　オレの提案に潤んだ瞳で見上げる。
　……自覚がないんだろうな。そんな無防備な顔をするなんて、襲ってくださいって言ってるようなもんだぞ。
「スモークが張ってあるから、窓から雷が見難いだろ？」
　コクコクと頷き、素直に後ろの座席に移動した託生に続き、オレも狭い車中を移動する。
　待っていたかのように胸に飛び込んできた託生を、両腕で包み込んだ。
「そんなに怖いか？」
「こ…怖くないよ」
　腕の中で震えながら、託生は引きつった顔で反論した。
「ぷっ！」
「な……なんだよ？！」
「いやー、託生は可愛いなと思って」
　笑い転げるオレを憮然とした表情で睨み返す託生に、更に笑いが込み上げてくる。

「もう！ギイなんて大っ嫌いだ！！」
　ぷいっと横を向いたその時、大きな雷鳴。
「うわっ！」
「大丈夫だって」
「うん……」
　ガチガチに震えながら縋りつく託生の甘い匂いに、不謹慎だがあらぬ妄想が横切っていく。
　託生は嫌がるかもしれないが……一石二鳥かも。
「なぁ、託生。雷が聞えなくなる方法知ってるか？」
「何……？」
　疑問符を浮かべた口唇に軽くキスをする。
「ちょ……ギイ……」
「託生は目を瞑ってればいいから」
　オレの胸を押し返そうと突っ張る腕ごと抱き締めて、口唇を重ねた。優しく上口唇を啄ばみ輪郭に沿って舌でたどっていく。抵抗をしていた託生の体から徐々に力が抜けていった。
　それを見計らって差し入れた舌先を、くすぐるようにゆっくり移動させて、託生の緊張をほぐしていく。
　その時、大きな雷鳴が鳴り響き、託生の体がビクリと跳ねた。
「オレの声だけ訊いてろ」
　優しく耳元で囁き、そのまま耳朶を啄ばんで、そっとシートに倒した。
「え……？」
「いいから。オレの声だけ訊いてくれ。……愛してる、託生」
　深く口付けて託生のシャツの裾から、すっと手を忍び込ませた。
「や……ギイ……こんなとこで……んっ！」
「この雨じゃ誰にも見られないって」
　狭い車内。身をよじろうにも逃げ場所はなく、二人の体を密着させる。ボタンを外し露になった肌にキスを落とすと、託生の口唇から甘い溜息が零れた。
「もう、やめ……」
　そう言いながらも、託生の指がオレの髪に絡まり先を促す。
　胸の突起を吸い上げると、喉元を反らせて甘い嬌声を上げた。
　現実と切り離されたような豪雨の音と、暗闇に浮かぶ白い裸体が余りにも幻想的で、オレの喉がごくりと鳴る。
　行為に溺れている託生には、自分の声が落雷に掻き消されて聞こえないのだろう。
　赤く散っていく花を、あちこちらに落としながら、いつもより高い託生の声に煽られていく。
「はぁ……ぁ……ギ……イ……！」
　上半身への愛撫だけに焦れたのだろう。託生が腰を押し付けた。
　素早く託生のズボンと下着を剥ぎ取り運転席に放り、そして左足をシートに掛け、大きく足を広げる。
「や・・・・・」
　羞恥に頬を染める託生のソレを握り締めると、先端から甘い蜜が零れオレの指を濡らしていった。
　手を添えたまま託生の口唇にキスを落とすと、自らオレの舌に絡みつかせ、深く口唇を合わせる。
　キスに応えながら、雷の遠ざかっていく様子に気づいたオレは、託生の理性が戻るうちに自分の物にするべく、ズボンのファスナーを下ろした。
　託生のモノで濡れた指先を蕾に差し入れ、ゆっくり抜き差しすると、託生は首を振ってキスから逃れ、欲情に濡れた瞳で訴える。
「はやく……」
　口唇がそう動いた瞬間、一気に押し入った。
「あぁ……！」
　奥へと導くように、託生が柔らかくオレを包み込む。
　快感が麻薬のようにオレの体を甘く駆け巡り、託生を全身で感じた。

　自由に動くこともままならない狭い空間で、二人の荒い息遣いと雨の音だけが、辺りを包む。
「くぅ……あぁん！」
　甲高い自分の声に気が付いたのか、託生は一瞬驚いた表情をし手で口を覆った。
　とっさに手を外し、腕の下で固定する。
「ギイ……いや……」
「聞いているのは、オレだけだよ」
「やだ……ん……！」
　溺れていく託生を見るのが好きだった。
　もっと喘がせてもっともっとオレに溺れて欲しい。
「託生……愛している……！」
「ダメ……も……ぅ……」
　限界を告げる託生に、より一層深く楔を打ち込む。
　とたん託生の中がふっと緩んで、次の瞬間断続的な収縮がオレを包み込んだ。
「ギ……イ……」
「くっ……」
　汗に濡れた顔がオレを魅了して止まない妖しい瞳の色を映し、オレは託生に飲み込まれるように最奥に放った。

「大丈夫か？」
「……足が痛い」
　口唇を合わせたまま訊くと、託生は顔をしかめて苦情を言った。
「あ、スマン」
　シートに掛けていた左足を戻してやると、ぷいっと横を向いてシャツの裾を引っ張って足元を隠した。
　その仕草が可愛くて思わず腕を伸ばす。
「ギイ？！」
「そんなに恥ずかしがらなくても、いいじゃないか」
「嫌なものは、嫌なんだ！」
　クスクス笑いながら託生を手伝い、雨足が弱くなった空を見上げ、
「そろそろ出発するか」
　運転席に移動した。
　のろのろと助手席に座ってシートベルトをした託生を振り返ると、憮然とした顔をして窓の外を見ている。
「怒ってるのか？」
「別に」
　口ではそういいながらも、不満たっぷりの表情に気がついた。
　な～るほど。
「物足りなかったか？」
「なっ……！」
　ガバッと振り返ってオレを睨みつける託生の顔は、キスをしたいくらい可愛らしい。
「帰ったら、ゆっくりしような」
「ギイの馬鹿――――――――――っ！！！」
　託生の叫び声とオレの笑い声が、雨の中に木霊する。
　たまには、こんなRainy Dayも悪くない。
　託生の文句を訊きながら、オレはそう思っていた。

TIME　OUT(2003.6)

　バイオリンの練習を終え、明日の講義の用意をして、ぼくはシャワーを浴びにバスルームのドアを開けた。
　ボディシャンプーの泡に包まれ、一日の疲れを流す。
「今日も、遅いんだろうなぁ」
　連日残業続きのギイに、溜息が零れた。
『バカンスに突入する前のこの時期は、どうしても忙しいんだ。その代わり、休みになったら二人で旅行でもしような』
　と、疲れを滲ませた顔で笑うギイに、ぼくは頷くしかなかった。
　キュッと栓を締め、雫を振り払う。
「でも、たまに早く帰ってもバチは当たらないと思うよ」
　頑張りすぎるギイを思い浮かべ、ぽつりと呟いた。
　ポン。
　その時、タイミングよく玄関のドアが開いた電子音が鳴り、ぼくは慌ててバスローブを羽織って、玄関ホールに続く寝室のドアを開く。
　案の定、そこにはネクタイを緩めながら極上の笑みを浮かべたギイが立っていた。
「お帰り、ギイ。今日は早かったね」
　早いと言っても十一時なのだが、毎日午前様のギイには、とても早い時間だ。
　ギイの事を考えていただけに、ぼくは嬉しさを隠しきれず、小走りに側に寄った。
「託生～、ただいま～」
　ギイは破顔して、ぼくを胸に引き寄せ、すりすりと頬を合わせる。
　ん？どうも、ギイの様子が変だ。
　その時になって、いつもと違うギイの匂いに気が付いた。
「会いたかったよ～」
「ちょっ……ギイ、もしかして酔ってるの？！」
　ぼくの質問には応えず、抱き締める腕に力を込め、尚もぼくに擦り寄ってくる。
「愛してるよ～、託生～」
「待って！ギイ！……んんっ！」
　熱っぽい口唇が乱暴にぼくを覆う。鼻腔を付くお酒の匂い。
　うわ。こういう時、どうしたらいいんだろう。
　初めての事柄に、ぼくの頭はパニック状態だ。
　とりあえず、ベッドに寝かせるのが先決だと判断したぼくは、ギイの体を剥がす為、手を突っぱねた。
「ギイ。横になった方が楽だろ？連れてってあげるから寝室行こう」
「いやだ～」
　駄々っ子のようなギイに、体を引き離す事も出来ない。
　このまま、ずりずりと引っ張っていく力なんて、ぼくにはないのだ。
「託生～～」
「わかった。わかったから。ぼくはここにいるから」
　お酒に強いギイが、どれだけ飲んだら、こんな風になるんだ？！それとも、疲れているからお酒の回りが速いのだろうか？
　せっかくシャワーを浴びたのに、ギイの抱擁から逃れようともがいているうちに汗だくになってしまった。
　お願いだから、ベッドまで歩いてよ！
「オレ、我慢できない～」
「は？え、何？……わぁっ！！！」
　ぐるんと目の前が廻ったと思ったら、背中に堅くて冷たいものが触れる。
　ギイの体重を支えきれず、その場に二人して崩れ落ちたのだ。
「託生の匂いだ～～」

子犬が鼻を鳴らすように、ぼくの首に口唇を押し付け、バスローブの襟元差し入れた手で、遠慮なしに体を撫でる。
「止めてよ、ギイ！」
ギイの意図を察したぼくは、必死でギイの胸を押し返した。
背中は痛いし、ギイは重いし、しかもこんな明るい玄関ホールでなんて、冗談じゃない！！第一、疲れてるんじゃないの？！
「ダメ！」
「愛してる～、託生～」
「ギ……ふぅ…ん！」
滑らせた舌先で鎖骨の辺りをゆっくりと舐め、神経がそこに集中したのを見計らって、噛み付くように肌を吸う。
酔っ払っていても、ギイ。的確にぼくの感じる所を責めてくる。
って、感心してる場合じゃない！
「ギイ！」
エスカレートしていくギイの手を両手で諌めると、ギイは口唇を重ね腰を摺り寄せてきた。
服越しに合わさったギイの熱いものに、ぼくの意志を無視してピクリと体が反応する。
「止めて……」
首を振ってキスから逃れると、ギイの口唇は顎を伝い、胸の飾りを目指してゆるゆると動いた。
「あ…っく……」
腰の辺りを撫で擦っていた右手が、ぼくの中心に移動し愛しそうに握り締めたとたん、体に纏わりついているバスローブに雫が吸い込まれる。
「は……ぁ……」
「託生……すっげぇ、色っぽい……」
「もう……こ……んなとこで……やだ……」
弱々しい抵抗にギイは満足そうに笑って、バスローブの紐を解いた。
「いや……だ……」
「託生……」
流されてしまう……微かに残る理性が、そう判断した時、
「ぐっ！」
ギイがお腹の辺りに圧し掛かり、一瞬息が詰まった。
「ギイ！重い！」
夢から覚めるように現実に引き戻され、ここでは嫌だと思っていた気持ちと裏腹に、思わず恨み言が口からでる。
「ギイ！重いってば！」
上半身を起こし、重りの元凶を睨みつけた。
「もう！重いって言って……ギイ？」
視線の先には、ぼくのお腹を枕にして、子供のように幸せそうな顔で眠っている酔っ払いが約１名。
「～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！」
こんの、酔っ払いがーーーーーーーーーっ！！！
乱暴にギイの下から体を奪い返し、しわくちゃになったバスローブを整えしっかり紐を結わえた。ついでに、ポカリとギイの頭を叩く。
もう、こんな状態にしたのなら、最後まで責任取ってよ！
規則正しい寝息で眠り込んでいるギイを睨みつけ、ぼくは寝室に向かった。
そして、布団と山ほどの目覚し時計を手に戻ってくると、ギイの頭上に目覚まし時計をセットして等間隔に並べる。
「目覚ましの用意をするだけ、有難く思ってよね」
言い捨てて、もう一度シャワーを浴びる為にバスルームに向かった。
その晩、広々としたベッドの真ん中で、大の字になって寝たのは言うまでもない。

　翌朝、ぼくが起きた時にギイの姿はなかったが、ソファの上に畳んだ布団と目覚まし時計とメモが１枚。

『昨日は悪かった。今晩は飲まずに早く帰るから、ベッドの半分空けておいてくれ。
それと、昨日の続きを所望。機嫌を直してくれるのを願う　　ギイ』

「それは、ギイの努力次第だよ」
　小さく噴き出して、メモを指で弾き飛ばした。

ギイを心配する託生くんが書きたかったのに、何故か寸止め託生くんを書いてしまった（爆）
いや、酔っ払いは本当に重いですよ、はい（笑）
(2003.6.24)

Stardust(2003.7)*Night*

　暗い闇……。
　ぼくの神経が研ぎ澄まされ、ギイの成すがままに落とされていく。
　肌を彷徨う冷たい指先。
　肌を粟立たせる熱い口唇。
　……そして、触れ合う二人の欲望。
　どこまでが自分で、どこからがギイなのか……。
　もう、ぼくにはわからない。

「コテージに行かないか？」
　翌日から二連休を控えた週末。
　仕事から帰るなり、ギイが瞳を輝かせて言った。
　碌に休みも取れず、働き詰めの日々。
　疲れを取る為にも、家で休んだ方がいいんじゃないかと言ったぼくに、
「託生とゆっくり恋人気分を味わう方が、疲れも取れるんだよ」
　と、ウインクを決めた。
　そして、今。
　誰にも邪魔されない空間で、ぼくはギイの腕の中に捕らわれている。

　バスルームから出たぼくを迎えたのは、カランと氷の滑り落ちる音と、淡いベッドサイドの明かり。
「託生」
　窓際のソファに座り、ウィスキーを傾けていたギイがぼくを呼んだ。
　大きく胸を肌蹴て艶やかに微笑むギイは、大人の男を感じさせ、ぼくは視線を外した。
　テーブルに置いてあるボトルもグラスも、身を飾るアクセサリーのように、ギイを引き立たせる。そして、ぼくはそんなギイを見るたび、胸をときめかせてしまうのだ。
「託生？」
　低い声に吸い寄せられるように歩を進め、ギイの隣に腰を下ろすと、ギイは当然のようにぼくの肩を抱き寄せ口唇を重ねた。
「……お酒の味がする」
　ギイは軽く笑うと、薄めに作った水割りをぼくに手渡し、
「託生も飲めば、わからないさ」
　グラスをカチリと合わせた。
「久しぶりだな」
　休暇を指しているのか、二人の時間が取れた事を指しているのか、ぼくにはわからなかったけれど、ギイが側にいてくれる事が嬉しい。
　そんなぼくの顔を見て、ギイは困ったように微笑み、髪にキスを落とした。
「もう少し飲んでベッドに行くから……我慢できる？」
「……バカ」
　一瞬で熱くなった頬を隠すように、ギイの肩に顔を伏せる。
　肩を震わせ喉の奥で笑うギイに「笑いすぎ」と抗議した。
「あ、託生に言っておくことがあったんだ」
「え、なに？」
　思い出したように呟いたギイの声に、顔を上げると、
「こんな時に言うのもなんだけど、休暇明けに託生と話する時間があるかどうかわからないから」
「うん」
「来週から、一ヶ月ほど視察で出張なんだ」
「え、そんなに？！」

　ギイの出張はよくある事だったが、さすがにこれほど長い出張は初めてだった。
「何とかして早く終わらせるつもりだけど、くそっ、親父の奴」
「お仕事だったら、しょうがないよ」
　そんなに長い間、一人でマンションに居た事がなかったから寂しいだろうけど、外交というギイの仕事では、長期出張はいつかある事だ。
　あ、でも……。
「ギイ、出張って何日から？」
「１９日から」
「そうなんだ……」
　ギイの誕生日の２９日は、いないんだ。
「もしかして、何か、あったか？」
「ううん。ギイの誕生日にギイはいないんだなって思って……」
　だからと言ってなんて事はないのだけど、誕生日くらいは一緒にいたいなと思うのは、ぼくの我侭だろうか。
「誕生日か。すっかり、忘れてたな。でも、もう祝ってもらうような歳じゃないぞ」
「それは、そうだけど……」
「託生に限り、プレゼントは受付中だけどな」
　意味深に笑い、ぼくの顔を覗き込む。
「……もしかして『ぼく』とか言わない？」
「それだったら、オレいつでも誕生日かも」
「ギイ！」
　もう、どうしてこう恥ずかしい事を、素面で言えるんだろ。
「じゃあ、欲しいものってなに？」
「くれるのか？」
「物によるけど」
「じゃ、言わない」
　意地悪くそっぽを向いて、ウィスキーを流し込む。
　もう、気になるじゃないか。
「ねぇ、なに？」
「託生がくれるんだったら、言ってあげる」
　ぼくの口唇をゆうるりと指でなぞり妖しく笑うギイに、催眠術がかけられたように目が離せなくなる。
「ギイが欲しいもの、あげる……」
「本当に？」
「……うん」
　近づいてきたギイの顔に、目を伏せる。
　そしてキスをしたまま、ギイはぼくを抱き上げた。

　欲しいものをあげるとは言ったけど……。
「なに、託生？」
「これが、プレゼントなの？」
　布で目隠しをされ、ベッドサイドの明かりですら遮断された視界。
　五感の一部を失い、本能的に他の感覚が鋭くなる。
　見えない恐怖がぼくを包み込み、伸ばした指先でギイの肌を辿って助けを求めた。
「いや、これが欲しいものじゃないけどな」
「じゃあ、これ取っ……」
「しっ、もう、黙れ」
　言うなり重なった口唇だけが、唯一のようなものに思えて、自ら口を開けギイの舌を誘い込む。

絡めては離れ、深くなっていく口付けに、ぼくの息が浅くなっていく。
離れた口唇が頬を伝って耳に辿り着き、
「愛してる、託生……」
囁かれて、全身に甘い衝撃が走った。
ギイの声も臭いも、肌を辿る手も口唇も、かすかに掛かる髪の毛すら、ぼくを狂気の世界に引きずり落としていく。
ギイの口唇が胸の突起に触れ、舌先で舐め転がすように口に含まれると、ぼくの体が揺れた。
「あ……ぁ……」
いつもより熱い体。
ギイの目に、どのようなぼくが映っているか考えるだけで、羞恥でおかしくなりそうだ。
「もう……やだ……あぅ！」
ギイが前触れもなく、ぼくを飲み込んだ。
衝撃に爪先が反り返り、足ががくがく震えている。
意志に反し、ぼくの手はギイの髪を掴み、腰は強請るように揺れ、全身でギイに応える。
「ギイ……ギ……イ……！」
駆け抜ける波に耐えようもなく、ぼくはギイの口中に欲望を放った。
ぼくの荒い息だけが全てのようで、ギイの存在を確認したくて伸ばした指先にギイがキスをした。
「これ、取ってよ……イヤだ……」
「もう少し……な」
そのまま額にキスを落とし、ギイがぼくから離れた。
「ギイ……？」
心細さに名前を呼ぶと、ギイの暖かな手が頬に触れ、そしてぼくを抱き上げた。
「え……？！」
ギイはそのまま大股に歩くと、窓を開けて、ソファらしきものの上にぼくを下ろした。
夜風と背中にあたる感触から、ここがテラスだとわかる。
「ギ……ギイ？！やだ！やめてよ！！……んんっ」
ぼくの抗議を無視して、ギイは口を塞ぐようにキスをし、内股に手を掛け大きく足を広げる。そして、声が上げられないように深く口唇を重ねたまま、ぼくの名残を蕾に落としやわやわとほぐしていく。
こんな山奥に誰もいないのはわかっているけど、それでも恥ずかしさが消えるわけじゃない。
「ギイ……お願い……止めて……」
「……いやだ」
舌を絡めたまま応えたギイの息が、荒く熱くなっている。ギイの欲望がぼくの内股を濡らす感触に、指を飲み込んだ蕾が条件反射のように蠢いた。
ここがテラスでもどこでも構わなくなってくる。
ギイが欲しい……！
早く、ギイで一杯にして欲しい……！
「ギイ……！」
瞬間、ギイがぼくに楔を突き刺した。
突然の事に順応しきれず、ぼくの体が硬直する。
「託生……託生、愛してる……」
「う……ぁ……」
甘い声に強張りが融け、ギイを包み込んでいく。首に廻した腕でギイを引き寄せ、キスを強請った。
ゆっくりと味わうように行き来するギイに呼吸を合わせ、ぼくの腰が揺らめく。
二人の熱い息が夜風に溶けて、どちらの物かもうわからない。
「託生……託生……」
徐々に早くなるギイの動きに翻弄され、波が押し寄せ、必死に手に触れるギイにしがみつく。
「ギイ……もう……ダ……メ……」
最後の訴えに、

「託生、目を開けて……」
　耳元に囁いてギイは目を覆っていた布を外した。
　圧迫感が解放され、思わず開けた視界には、眼前に迫ったような降り注ぐ星……！
「あ……あぁっ！！」
　そして、ぼくは星に包まれながら、奈落の底に落ちた。

「う……ん……」
「大丈夫か？」
　目を開けると、心配そうに覗き込んでいる茶色の瞳。
「ギイ……」
　ゆっくり起き上がると、掛けられていたナイトローブが肩から流れ落ちた。
「すごい星だね」
「あぁ……街では見れないからな」
　ソファに座ったぼくの肩に腕を廻し、ぼくを抱き寄せる。
　胸に耳を当て、聞こえてきた鼓動は規則正しい静かなものだった。
　二人を優しく包み込む夜風と瞬く星達に、この世にはぼくとギイしかいないような錯覚になる。
「そう言えば、欲しいものって……」
「有難く頂戴しました」
「なに、それ？一体、なんだったの？」
「内緒」
「もう！教えてくれるって言ったじゃないか！！」
「はははははは……」
　ギイは声を上げて笑い、ぼくの頬にキスをした。
「託生、流れ星！」
　ギイの声に慌てて空を見上げると、すーっと線を引くように、白い星が流れ消えていった。
「そろそろ部屋に戻るか。冷えてきただろう？」
「うん」
　ギイに手を取られ、部屋に戻るぼくの背後に、もう一つ星が流れた。

七夕ですね～（おいっ）
って、考えたら、何故だかこんな話になってしまった；
半年振りにウラを書いたら、感覚がわからなくなってしまって、エロいのかエロくないのか、う～ん、悩む所です（爆）
で、これは、ウラでよかったんですかね？（←既に、区別ついてない奴）
（２００３．７．５）

っと、いったいプレゼントはなんだったのかと以前言われまして、そういや後書きにも書いてなかったと思い出しまして。
まぁ、星に包まれた託生くんが欲しかったと、そういうことです。
はい。

Time after Time(2004.12)

『Pipipipi……』

「う……ん」
　もう、朝か。
　目覚ましの音に、オレは手探りでサイドテーブルに手を伸ばし、目覚ましのスイッチを切った……はずだった。

『Pipipipi……』

　ん？
　スイッチを切ったのに、どうして、まだ目覚ましが鳴っているんだ？
　と、ぼんやりとした頭で考えていたら……。
　ひとつ、ふたつ、みっつ……盛大にハーモニーを奏でだした電子音に一気に目が覚め、ガバッと起きた目の前には山ほどの目覚し時計。
「なんだ、これ？！」
　とりあえず、ひとつひとつのスイッチを切り、ようやく止め終わった時に、気がついた。
「ここ、どこだ？」
　目の前には大きなドア。今まで寝ていたのは大理石の上。
　キョロキョロと周りを見回して、ここが玄関ロビーだというこはわかったが……。
「なんで、オレ、こんな所で寝てるんだ？」
　冴えない頭で昨晩の事を思い出す。
　付き合いで飲んで、車に乗り込んで、それから……。
　思い出せん。
　とりあえずシャワーでも浴びて、それから考える事にしよう。
　託生が掛けてくれたらしい布団と山ほどの目覚し時計を抱え、寝室のドアを開くと、薄暗い部屋のベッドの真ん中に託生の姿が見えた。
　ソファに両手に抱えた物を置き、ベッドの側に忍び寄る。
　託生は、特別寝相が悪いというわけではない。だから、寝る時の位置と起きた時の位置は、そんなに変わるものではない。
　という事は、初めから託生は真ん中で寝ていたわけだ。
「オレ、昨晩、なにか託生を怒らせるような事をしたのか？」
　自問しても答えが出るはずがなく、仕方なくバスルームへと向かった。

　いつもより熱い湯を頭から掛け、ふーっと溜息を吐く。硬い大理石の上で寝ていたせいか、体の節々が凝り固まり、体を動かすたびにバキバキと音が鳴った。
　しかし、妙な違和感が……。
「オレ、柔らかい何かの上で寝てなかったか？」
　玄関ホールに柔らかい物があるはずがないし、事実、大理石の上で直接寝て現在体が痛い。
　しかし、物凄く寝心地のいい何かで寝たような気がするのだ。
「そういや、託生とSEXをしたような、していないような……」
　下半身の記憶は全然ないのだが、すっきりしていない様子を見るとSEXはしていないのだろう。
　釈然としないままシャワーの栓をきゅっと止め、バスローブを羽織ってガシガシと頭を拭きつつドアを開けた。
　そこには、まだ夢の中の託生。
　考えを纏めてみると、SEXはしていないようだがそれらしい事があり、柔らかい何かの上で寝て、託生

は怒っていると。
「もしや……」
　恐ろしいシナリオが頭に浮かんだとたん、すっこーーんと抜けていた記憶が蘇りオレは頭を抱えて座り込んだ。
　託生を襲ったままその場で爆睡したなど、その気にさせられて放っておかれた託生の立場を考えれば許される事ではない。
「最悪、禁欲を言い渡されるかも」
　それは、ヤバイ。
　タダでさえ可愛らしい託生の寝顔に、すっきりしていない下半身が反応し始めているというのに、これで禁欲と言われたらのた打ち回るぞ、オレ。
「なんとか手を打たなければ……」
　とは言っても、もう既に時間が迫っている。
　託生を起こして……いや、寝起きの悪い託生を無理矢理起こして、余計機嫌が悪くなっても困る。
　かと言って、何も言わずに仕事に行くのも憚られる。
「とりあえずメモを残して、帰ってから謝り倒すしかないな」
　そう結論付けテーブルの上にメモを置き、もう一度ベッドに近づき託生を覗き込んだ。
「ごめんな。今日は早く帰るから」
　頬に軽くキスを送り、柔らかい髪を撫でる。
　スケジュール調整に悩む島岡には悪いが、託生の機嫌を直すのがオレにとって最重要事項なのだ。
「オレって健気だよなぁ」
　呟きつつ、どうやって島岡を言いくるめようか思案するのであった。

え～「TIME OUT」の続編ということで。
ってか、これ埋もれてたんです；
PCを整理していたら出てきた；
忘れ去ってた代物で、書き直すのも修正するのも面倒なんで、このままupします。
ので、お見苦しい点があると思いますがご容赦を。
しかし、ギイ、キャラが違う・・・・・・・・。
(2004.12.24)

Japanese Item(2004.12)

「うわっ！寒い」
　講義を終えて校舎を出たとたん、寒風が体を包んだ。
「このままだと凍っちゃうよ」
　目も開けていられないほどの強い風に涙を潤ませながら、ぼくはギイの待つマンションへの道のりを急いだ。
　ここNY。
　今日から珍しくギイは三連休。ぼくはと言えば、どうしても抜けられない講義の為、仕方なく大学へ行き、帰路を急いでいるというわけだ。
「どうしてNYは、こんなに寒いんだ？早く帰って非難しなきゃ」
　寒いのは超苦手なぼくである。暖かい部屋に戻って、温かいコーヒーでも飲んで、そして……温かいギイの腕で……。
　って、何考えてるんだ？
　ひとりで赤面しながらマンションのエントランスに入り、エレベーターのボタンを押して乗り込む。
「ただいま」
「お帰り、託生」
　ドアを開けながら声をかけると、極上の笑顔でギイが出迎えてくれた。いつもは逆なので少しくすぐったい。
「寒かったろ？」
　言いながら、ぼくのコートとバイオリンを受け取ってくれる。
「誰か来てるの？」
　ごとごと鳴る音に、疑問を抱き訊いてみると、奥の部屋から数人の男の人が出てきた。
"完了しました"
"あぁ、ご苦労さん"
　ギイは言いながら、渡された書類らしきものにサインをし、男の人達は帰っていった。
「何？」
「ん？部屋の改造」
「って、あの物置部屋？」
「そ」
　他の部屋に比べて小さく、本来ならば物置き部屋になるであろう部屋がひとつあった。ただし、二人で暮らすにはそこまでの荷物がないわけで、結局は何も置いていない開かずの部屋になっていたわけだ。
「急にどうしたの？」
「ふふふ・・・」
　悪戯っ子のような微笑でぼくの手を取り、部屋のドアを開けたギイに続いて、入ってみると……。
　懐かしい畳の香り。襖の押入れも床の間も、そして、日本さながらの和室が出来上がっていた。
「ギイ！これって……」
「余らせておくのも勿体無いしな。どうだ？」
「すごい……」
「気に入ったか？」
「うん！」
　天井まである障子には笑ってしまうけど、ギイのする事は相変わらず突拍子もない。
「んじゃ、最後の仕上げといくか」
　と言いつつ、ギイは部屋の外に置いていた箱に手を掛けた。
「何、それ？」
　大きな箱が2つ。
　ギイはにんまりと笑い包装紙を破った。
「あ！」

　そこには懐かしい日本語で大きく「炬燵」と書いている。
「本物のコタツ？」
「当たり前だろ。島岡が日本に出張に行ったとき、こっちに送ってもらうように頼んだんだ」
　鼻歌を歌うようにダンボールを開けていくギイに、ぼくはある事を思い出した。

　一週間ほど前の事だ。
　ベッドに座りながら吹き荒ぶ雪を見ている時、バスルームから出てきたギイがぼくの視線を追い、
「かなり吹雪いてきたな」
　窓の傍に寄った。
「こんな日は、コタツが恋しくなるね」
「あぁ、そうだな。日本の冬のアイテムだもんな」
「そうそう。コタツに入ってみかん食べて、テレビでも見て」
「お、みかんと来るか？オレはやっぱり、熱燗だな。差しつ差されつ、キュッとやってみたいね」
「……ギイ、おやじみたい」
　呆れるぼくをじろっと睨んで、
「そんな事言うヤツは、オシオキが必要だな」
　ベッドに座っていたぼくを、押し倒した。
　そのあとは、ご想像通りの展開である。

「ぼくが言ったから？」
「ん？そんな事ないぞ。オレもコタツ好きだし」
　にこやかに、しかし何故かしら意味深に笑った。
「それより、託生、手伝え」
　言われなくても、喜んで手伝います。
　コタツを組み立て布団を広げ部屋の中央に置くと、冬の和室の出来上がり。
「お、なんとからしくなったじゃないか」
「うん。日本にいるみたい」
　早速スイッチを入れて潜り込むと、じんわりと冷えた足を温めてくれる。
「しあわせ～」
　ぼくの台詞にプッと噴出し、
「そんなに喜んでもらえると、嬉しいな。ちょっと待ってろ」
　部屋を出て行った。
　ギイったら。ほんと、甘やかしてくれるんだから。
「お待たせ」
　どこから調達してきたのか。トレイではなくお盆に徳利とお猪口。するめに、かに味噌……。
「まだ、お昼だよ」
「まぁまぁ。どうせ、明日も明後日も休みなんだから、たまにはいいだろ？」
　向かいの席に座り、徳利を差し出す。酌を受け、交代でギイのお猪口に日本酒を注いだ。
「乾杯」
　ぐっと一息で飲むとアルコールが染み込み、冷えた体が内側から熱くなっていく。
「うん。旨い！」
　辛口の酒に舌鼓を打ち、ギイは早速おつまみに手を出した。
　うん。たまにはこんな日もいいよね。
　嬉しそうなギイの顔を見ながら、
「もう一杯どう？」
　徳利を差し出した。

　すれ違いが多かった数日を埋めるように話は盛り上がり、徳利が数本コタツの上並んだ時、ふと思った疑問を投げかけた。
「ギイが日本酒飲めるとは、知らなかったな」
　機嫌よく飲んでいるせいか、ギイは少しだけ目元が赤くなっていたが、全然酔っている素振りがない。
「オレは、アルコールなら何でもOKだぜ」
「もしかして、これがしたいが為に、改造したの？」
「うーん、これだけじゃないけどな」
「じゃ、何？」
　待ってましたとばかりに、おもむろにコタツ布団を捲り、あっけに取られているぼくを尻目に潜り込んだ。
「ちょっ……何してるんだよ？！」
「これって、コタツの醍醐味だよな」
　ギイは、ぼくの足元から顔を覗かせ、腰を浮かそうとするぼくを、がっしりと腕を廻して捕まえた。
「や……やめてよ。お酒、飲むんだろ？」
「酒より、オレはこっちが飲みたい」
　とんでもない事を言いながら、器用にベルトを外し、ファスナーからすっと手を差し入れた。
「ん！……ギイ……ダメ……だったら……」
「こんなになって、ダメじゃないだろ？」
　徐々に力を込めるギイに、弾む息が抑えられない。
「やめ……ぁ……」
「託生……」
　うっとりと囁き、ギイは口唇を寄せた。

「は……ぁ……」
「ごめん……背中痛くなかったか？」
　すまなそうな顔をして、ギイが前髪をかき上げた。
「ぼくは大丈夫だけど……」
「だけど？」
「ギイこそ大丈夫？」
「何が？」
「いや……熱くなかったかな？と」
　当たり前だがコタツの中というのは余りにも狭いので、途中から二人して上に移動したのだが、足はまだコタツに入ったままで。
「ん～、ちょっと暑かったな」
　苦笑しながら横に転がり、やんわりとぼくを胸に抱き寄せた。
　トクントクンと聞こえるギイの鼓動が心地良い。
　優しく髪の毛を梳くギイの指とじんわりと暖かいコタツの温もりに、自然瞼が閉じてくる。
「託生？」
「う……ん……」
　名前を呼ぶギイの声も子守唄のようだ。
　クスクスと笑う微かな振動に、ぼくは意識を手放し幸せな眠りに付いた。

昨日の引き続き、これも出てきました；
２年位前に書いたような気が……。
ちょうど冬だし、まぁいっか（笑）

(2004.12.25)

Pillow Talk(2010.10)

　託生が暮らすワンルーム。
　一ヶ月ぶりに恋人の時間を堪能し、狭いシングルベッドの上で託生を腕に閉じ込めピロートークを楽しむ。
「託生、髪切った？」
「あぁ、一週間前くらいにね。かなり伸びてたし」
「ふぅん」
　言いながら、託生の少し汗ばんだ髪を指に絡ませると、くすぐったそうに首を傾げた。柔らかな頬に、そのままキス。
　猫が喉を鳴らすように、気持ちよさそうな表情でオレに身を任せていた託生が、ふと目を開けた。
「そう言えば、『髪、染めませんか？』って言われた」
「髪を？」
「うん。『男性が染められるのは、就活までと白髪が生えたときくらいですよ』って」
　その情景を思い出しているのか、託生はクスクスと笑いながら楽しそうに報告するが、オレは全然面白くない。
　くそっ！！
　接客とはわかっているが、託生のこの髪に触って、尚且つ会話を楽しんだだと？
　今度散髪に行くときは、付いて行って脅しを掛けてやろうかと頭をフル回転させる。
　そんな物騒な事を考えているとは露知らず、
「そのときは断ったんだけどね、似合うと思う？」
　託生は上目遣いにオレを見上げた。
　……どうしてこう無自覚に可愛いのだろうか。
　離れている間に、どんどんレベルアップしているような気がするのだが、それはオレの気のせいなのか？
　オレの複雑な心中に気付かず、託生は「ギイ？」と応えを促した。
　茶髪の託生ねぇと、思い浮かべてみる。
　意志の強そうな黒髪もいいが、託生なら茶髪でも似合うだろうな。
　しかし、今より柔らかな雰囲気になるだろうから……ダメだ！余計な虫がつきそうだ。
　返事を待つ託生に、
「今のままで十分だと思うけど……託生は染めたいのか？」
　頭から反対するわけにもいかず、一応遠回しに「反対だ」と言ってはみたけれど、どこまで託生に伝わるのか。
　託生は「うーん」としばし考え、
「……ギイと同じ色なら、いいかなと思うけど」
　お揃いみたいだし。
　と、頬を染めて付け加えられたら。
「やっぱり、託生、可愛すぎ！！」
「ちょっ……ギイ！」
　慌てふためく託生を力いっぱい抱きしめ、口唇を重ねる。
　可愛すぎて、可愛すぎて、このままアメリカまで攫って帰りたくなるくらい、可愛い。
「託生、浮気するなよ」
「もう、どうして、そんな心配するかな？」
　腑に落ちないと顔に書いた託生に苦笑いし、
「オレ、黒髪の方が好き」
　託生の額に前髪ごとキスを落とした。
　頼むから、オレのライバルを増やしてくれるなよ、託生。離れている分、いつ変な虫がつくかもとハラハラしてるんだぞ。
　オレの心が聞こえたのか、託生はクスリと笑い、

「うん、染めない」
　素直にオレの注文に頷いた。
「それよりも、託生」
　オレ、もう一度欲しいな。
　勃ちあがった半身を託生のモノにこすりつけ、耳朶を口唇で挟みながら強請ると、託生は顔を赤く染め「もう一回だけなら……」と目を伏せた。
　可愛い顔から艶っぽい顔に変化する瞬間。
　次に会う時までの為にと目に焼きつけ、託生と共にベッドに深く沈んだ。

イラスト集を見ていて、託生くんって黒髪というより茶髪だよなぁ（イラストなんだから当たり前；）というアホな発想から、こうなりました。
遠距離の二人を書くのは、もしかして始めてかも……。
(2010.10.13)

Present for You(2011.7)

「もういいよ！ギイのバカ！」
　プチッ。ツーツーツーツー。
「勝手にしろ！」
　切れている携帯に怒鳴っても仕方がないのだが。
　託生と喧嘩した。
　何が原因だったのか、今となってはわからない。ほんの些細な事から二人ともヒートアップし、携帯越しに怒鳴りあい、気付けば一週間ぶりのラブコールは切れていた。
　力なくソファの背もたれに体を預け、携帯を放る。
　どうせ、もう一度かけたって、意地になって託生は取らないだろう。
　同じ日本にいれば、どれだけ時間がかかっても車を飛ばして行けるのに。怒鳴りあってでも言葉を重ねて、お互い納得できる地点までたどり着けるのに。
「やっぱり、攫ってくればよかった」
　こんな時、特に思う。
　日本とNYの距離だけじゃなく、心まで遠くなったような気がして、大きな溜息を吐きがっくり項垂れた。

　……何か音がする。
　カチャカチャとぶつかる、微かな金属音が耳に届く。
　うるさいな。今日は休みなんだから、ゆっくり寝かせてくれよ……。って、ちょっと待て！
　ガバッとベッドの上に起き上がり耳を澄まして、空耳ではない事を確認した。
　オレ一人しかいないはずなのに。泥棒か？いや、ここはセキュリティが完璧なんだ。早々入ることはできやしない。
　ベッドを抜け出し、護身用の銃を持って、そろりそろりと音の聞こえる方向に向かい……ダイニングか。そこに金目の物は置いてないぞ。
　音を立てないようにゆっくりドアを開け覗き込むと、見覚えのある……いやいや、オレの最愛の恋人が可愛らしくエプロンをつけてそこにいた。
「た…くみ……」
「ギイ、おはよう」
　呆然と立ち尽くしているオレに気付き、託生が朝の挨拶をする。
「おはよう……って、なんでお前がここにいるんだ？！」
「もちろん、合鍵使って。それより、その物騒な物どうにかして」
　ヤバッ！慌てて後ろ手に銃を隠し、そのまま手に触れた家具の引き出しに銃を放り込む。
　そうだ。託生ならなんなく、このマンションに入れる。本人、合鍵でドアが開いていると思っているが、同時に指紋認証、虹彩認証も行いロックを解除しているのだ。
　って、思うところは、そこじゃない。
「いや、だから、お前アメリカに来るなんて、一言も言ってなかったじゃん！」
「そうだね」
「そうだね、じゃなくて……！」
　託生はぎゃんぎゃん騒ぐオレをチロリと見やり、
「もう、うるさいなぁ。ギイ、そこに座って」
　カウンターテーブルを指差した。
「答えになってないぞ！」
「す・わ・れ」
　ドスの効いた声に、
「……はい」

　大人しくスツールに腰を下ろすと、
「あと3分ほどでできるから、待ってて」
　託生がガスレンジの方向を向きながら、声をかけた。
　そして、
「はい」
　目の前に置かれたお椀。
「わかめの味噌汁？」
「誕生日だろ、今日？」
　……忘れてた。託生と喧嘩して、仲直りの電話をする間もないくらい仕事に追われて、日付の感覚も麻痺していたようだ。
　カウンターごしに託生を見上げると、
「誕生日おめでとう」
「……ありがとう」
　優しい瞳がオレを見ていた。

「ごちそうさん。美味かった」
「お粗末さまでした」
　託生は、にっこり笑ってお椀を下げ、そのまま洗い物を終わらせて、
「じゃ、帰るね」
　エプロンを鞄に突っ込んで、横に置いていたバイオリンケースを持ちスタスタとドアに向かって歩き出した。
「ちょっと、待て！！」
　慌てて追いかけ、ドアを開ける寸前、肩を掴んで方向転換させる。
「へ？」
「へ？じゃない！なんだよ、それ？！お前、いったい、何しに来たんだよ？！」
「お味噌汁作りに」
「それだけ？それだけなのか？久しぶりに恋人に会って、いちゃいちゃしたいとは思わないのか？」
　オレは、託生といちゃいちゃしたいぞ！
　肩を揺さぶる勢いで言い募ると、
「……ぼく達、喧嘩中だったよね」
　冷めた目で見上げられ、そう言えばそうだったと思い出す。突然の託生の出現に、完璧に忘れていた。だが、今はそんな事関係ない！
「喧嘩中でも何でも、2ヶ月ぶりなんだぞ？それに、まだ喧嘩中というのなら、仲直りするまでここにいようとは思わないのか？夏休みだろうが！」
「だって、すぐ帰るつもりだったから、何も持ってきてないし」
　と、小さな鞄を目の前に上げる。
「……その鞄、何が入ってるんだ？」
「んー？お味噌とかつおぶしと乾燥わかめと乾燥ねぎとエプロンとパスポート。さすがに塩蔵わかめは無理かなぁと思ってさ」
　言われて鞄を覗き込むと、本当にそれだけしか入っていない。いや、それよりも、よく税関で引き止められなかったな。
「なぁ、託生」
「うん？」
「服も下着も歯ブラシも、全部オレが用意するから帰るな」
　ビシッと命令したオレに小首をかしげ、
「いつまで？」
　不思議そうに聞く。

　いつまでって……。
「これから先、ずっと！」
　……は、さすがに無理か。
　でも、これがオレの願いなんだ。これ以上離れて暮らすのは、耐えられない。喧嘩したって、すぐに仲直りできる距離でないと気が狂いそうなんだ。
　託生の顔が曇るのなら、すぐにジョークにしようと思っていた。
　しかし、託生はオレの言葉に真剣な表情をして「うーん」と腕を組み、
「でも、入学には1ヶ月早いんだよね」
　と、首を捻って思案する。
「入学？」
「言ってなかったっけ？9月からジュリアード留学」
「……聞いてない」
「あ、そうだった？ごめんごめん」
「託生……」
「うわっ！」
　あっけらかんと報告する託生を抱き上げ、溢れる喜びそのままに、その場でくるくる回る。
「ちょっ、ギイ！」
「託生、愛してる！！」
　もう、なんて、可愛いんだ！
　そんな重大ニュースを伝え忘れる所も、味噌汁を作るためだけに渡米する所も、可愛くて可愛くて仕方がない。
　オレの首に腕を廻ししがみついていた託生の顔を覗き込み、
「とりあえずは、ベッドで仲直りしないか？」
　返事を聞く前に口唇をふさいだ。
　今年の誕生日のプレゼントは、わかめの味噌汁と託生。
　お返しは、明日にでも一緒に買いに行こうな。

ギイ、誕生日おめでとー！
と、初めて、時流に乗れたような気がする；
でも、ギイも託生くんも、キャラ変わってるけど。
というか私の書くギイタクは、シリーズ物以外、一貫性がないんです。
これは、ちと問題かな？と思ったこともあるのですが、色んなテイストで色んなギイタクを書きたいと思ってしまうのだから仕方がない……と開き直っております（笑）
なので、細かいところはご容赦を。
個人的には、黒ギイの開発が今は楽しいです。
(2011.7.29)

奥付

摩天楼の下で

りか

URL http://greem.shop-pure.net
MAIL greenhouse@shop-pure.net